

3. 推薦区分 *

推薦区分を以下から選択してください。

- 自薦
- 他薦（推薦者）※専任教員
- 他薦（被推薦者）

自薦/他薦（被推薦者）

エントリー期間：2026年1月5日(月)00:00 ～ 2026年3月31日（火）23:59

4. 授業科目名 *

申請する授業科目名（※2025年度開講）を入力してください。

演習（ゼミ）

5. シラバス（URL） *

申請科目のシラバスURLをご入力ください。

<https://portal.tku.ac.jp/syllabus/public/pubShowSyllabus.php?sno=177143&rlcd=10065-135&mt=0&year=2025>

6. 該当する達成基準 *

申請科目が該当すると考える達成基準を以下から選択してください。

※複数回答可

- 全学や学部の3ポリシー実現に寄与する取り組み
- 授業実践における課題への取り組み
- 学修者主体の教育への取り組み
- 本学の教育の質向上に資する取り組みであり、他の授業の参考となる取り組み

7. 教育実践の目的・目標 *

申請科目を通じて目指す教育目標をご入力ください。

本学で最も大人数の演習のひとつとして、学生とともに汗を流し、研究活動や社会貢献活動に邁進することをモットーとしている。そして教育実践の目的・目標としては、全学・学部のポリシー実現への寄与を意識しつつ、研究活動、社会貢献活動、イベント活動を含む様々な教育的活動（授業実践における課題解決及び教育の質の向上への取り組み）を通じて、①学生が日々成長し、学生自身が根拠をもった自信をもてるようになること（学修者の主体性の醸成）、②学生自身が圧倒的な就職力を身につけること（学修者の成果の向上の一部）、③学生が努力した証として、就職活動や大学宣伝に資する客観的な成果をあげること（大学自体の教育的質の向上と対外的なアピールの向上）、などがあげられる。そのプロセスの中では、後に示す個々の具体的な教育目標や取り組みが数多存在している。

8. 取り組み内容 *

申請科目における、独自の工夫や先進的な取り組みの具体的な内容をご入力ください。

【独自の工夫や先進的な取り組みの内容】 ＊一部取り組み自体が成果の場合あり

①全ての教育研究課題（研究活動、学外コンペ、コラボ活動での資料作成・プレゼンなど）において、学生らの成長を信じて、成果物作成に向けて「愚直な」までの批判的討論を繰り返すことによって、ディスカッション能力、プレゼン能力、資料作成能力を引き上げることを第一義的な目的としている。それはいわゆる先進的なものとは言えないかもしれないが、まわり廻ってこのように「徹底的な」批判討論のプロセスによってより良い成果物を作り上げていくプロセスは、今日的には希少な取り組みとなりつつあり（単なる議論ではなく、面倒ではあるが、一発表に対して私を含めたゼミ生全員が丁寧にかつ徹底的に質問・意見する取り組み）、考えようによっては先進的ととらえることもできるかもしれない。

②上記のためには、「場」づくりと「ゼミへの帰属意識」が大切だと考えており、そうした「場の雰囲気」や「ゼミへの帰属意識」の醸成ができる工夫を心掛けてきた。たとえば、個人研究の発表や対外的コンペ発表においては、ただ単に議論・討論で終わらせるだけでなく、後で個人的にフォローを入れて指導するとか、モチベーションやゼミの帰属意識を維持するためにイベントなども開催し、オン（研究・勉強）とオフ（楽しさ）を織り交ぜながら、学生らのモチベーションを切らさないように心掛けた。さらに、批判討論から成果を生み出すためには、その「場」をつくと同時に、その成果を発表（プレゼン）する「場」（対外的なコンペ参加、企業とのコラボ活動、社会人との関わりも含む）を積極的に設けることにも腐心した。

③ゼミ生「全員」が個人研究活動と並行して、対外的コンペへの参加、企業や様々な組織とのコラボの取り組みを推進していること自体が本学では稀有な教育実践である（ゼミ生全員が個人研究と企業ラボ・対外的コンペを同時並行で行うもの）。とかく内々で（何かやりましたで）終わらせるゼミ活動にとどまらず、対外的な「場」で、日々の成果を発揮し、ゼミ生の実力を磨き、自信を獲得することを意図している。なお、個人的には、コラボ活動や学外的なコンペだけに偏っているゼミにならないように、個人研究活動にも力を注ぐようにしており、その成果を含め、ゼミ生全員が全方位的な進め方をしているのは、小木ゼミだけだとの自負はある（ゼミ生全員が個人研究と企業とのコラボ活動・対外的コンペの2つを同時に並行して徹底的に行うことは独自性がある）。

④大人数で行う通常のゼミ活動とは別に時間をとり、ゼミ生の個人カルテ（自分史や自己評価書の提出も含めて）を作成することにより、個人面談時間を設け、個別の指導を丁寧にやっている。これは大人数ではありながら進めているという意味では先進的な取り組みと言える。ゼミ生が多いことに加え、各人のテイストに合わせなければならないために、かなりの時間を取られるが、こちらが示すKPIの達成状況から情緒的な評価まで、様々な視点から個人と面談し、次なる目標へのモチベーション、さらには就職や生活に関する相談・指導も合わせて断続的に行っている。会社の人事評価システムや相談システムに近いものの導入である。

⑤ちなみに、先進的な取り組みではないかもしれないが、多くの成果を出すために相当なサブゼミ時間を用いていることは致し方なしという状況である。研究・活動の閑散期はサブゼミを行わないとするなどの工夫をしているが、教学上許されれば、繁忙期にゼミ活動を多めにやり、閑散期には休んでも良い制度の導入も検討してほしい（現状だと活動時間がオンされているだけなので）。

⑥上記等の取り組みは、ディスカッションを必要とする授業（たとえば、ケースメソッドなど）や就職力の向上などに寄与しており、ゼミ生からは「就職時の面接でとても役に立った」「成長できた」などの意見を多数もらっている。おそらく自信をもって就職活動に臨んでいることが大きいと言える。

【25年度の具体的な取り組み項目（詳細は「具体的な成果」で記す）】

具体的には、ゼミ内での個人研究のプレゼン及び研究ノート、卒業論文に向けての活動（ゼミ生全員が各人発表するので相当な手間と時間がかかる）、西武信用金庫主催のチューデントアワード（アイディアコンテスト）の資料作成・プレゼン、東京都消費生活にむけての提言への参画、消費者庁・消費者教育学会主催の消費者学生セミナーでの制作ブ

レゼン、株式会社NAGAOKA主催「こんな商品・サービスあったらいいな」プロジェクトでの社長プレゼン、本学SDGsに資するRE:キャップ・プロジェクトの実施、JR東日本及び社会福祉法人Annbeeとのにしこくおみやげプロジェクト活動、Web国分寺物語の企画・制作・運営、TFT健康ランチの提案・企画・販売促進、各所での様々なプレゼンなど、各自の個人研究（最後は卒業論文につなげる）を進めながら、発表や活動を行えるような「場」づくりに力を注いだ。また、個人カルテに基づいた個別指導を導入し、研究活動・生活指導・就職活動などのアドバイスも並行して展開した。

9. 具体的な成果 *

取り組みを通じて得られた具体的な成果をご入力ください。

25年度の成果は以下の通りである。以下の具体的な成果は、先の「独自の工夫や先進的な取り組みの具体的な内容」をベースにして教育実践された一連の成果である。なお、取り組み自体が成果となっている部分があることはお許し願いたい（最優秀賞をとったことだけが成果とは考えていないので）。

①個人研究（ゼミ生全員）の遂行（卒業論文、研究ノート含む）

2年生（8名）は個人研究を進め、3年生（13名）は個人研究をアップデートさせ、研究ノートにまとめる。4年生（13名）は、さらに研究を深め、卒業論文などを進める。3年生までに研究ノートをプレ卒論レベルまでに引き上げ、就職活動に活かしてもらっている。この成果は、企業先からも非常に評価されている（3年生で卒論レベルまで書き終わっているため）。また研究ノート及び卒論提出数（及び提出率）は学内ゼミトップであり、経営学部でも卒業論文提出者のおよそ全体の5分の1に相当すると聴いている。もって内容もさることながら、研究ノート及び卒業論文の活性化に寄与している。

②西武信用金庫主催：学生アイデアコンテストで最優秀賞（グランプリ）獲得

12月5日、西武信用金庫本社にて、毎年行われている数大学数チームによる商品・サービスの課題に対するアイデア提案を行う大会で、小木ゼミ2年生チームが最優秀賞（グランプリ）を獲得した。この成果により、本学の名声を高めた。実際に、西武信金の本学からの採用数は全大学の中でも断トツのトップとのことで、少なからず本大会の影響（信用）により、本学の学生の就職に貢献していると思われる（この大会で入賞した東経大の学生には内定を出すとのこと）。

③東京都：消費生活に向けての提言で賞状の授与

東京都からの依頼を受け、東京都の消費生活への提言を、小木ゼミ生が都庁でプレゼンした（2025年5月）。最終的な案がポスター化され、新宿などのデジタルサイネージや、都内の大学、高校にも掲示・展開された（賞状を授与）。ゼミ生たちはこれまでとは異なった知見を得たのではないかと思われる。

④消費者庁・消費者教育学会主催：消費者学生セミナーで最優秀賞・優秀賞の獲得

8月28日、消費者学生セミナー（消費者庁・消費者教育学会主催のセミナー／様々な大学の学生40名程参加）において消費者に向けた啓発プログラムの作成と提言に関するプレゼン提案を行い、ゼミ3年生が所属するチームが最優秀賞及び優秀賞を獲得した。ゼミ生にとってはやや異なる分野（消費者問題）でのプレゼンであったが、これまでの提案力やプレゼン力を活かし、日ごろの成果を存分に発揮した。

⑤NAGAOKA「こんな商品・サービスあったらいいなプロジェクト」で社長プレゼン

11月5日、本学にて、レコード針で世界シェア99%を誇る、株式会社NAGAOKAの長岡江社長らの前で「こんな商品・販売あったらいいなプロジェクト」と冠して、商品・サービス提案及びプロモーションのプレゼンを行い、ゼミ3年生3チームが各賞を獲得した。これにより、本学の名声を高め、ゼミ生は自信を獲得し、就職力を養うことができた。

⑥RE:キャップ・プロジェクト活動

国分寺キャンパスで回収したペットボトル（回収ボックスを校内に設置）の蓋を活用して、ハニカム構造のアップサイクルコースターを制作・販売した。ソーシャルマーケティングの一環として、環境問題に挑戦したもので、国分寺の各祭り、大学祭、生協などで販売した。本学のSDGs宣言に資する取り組みとして評価できる。販売で得られた収益分は、寄付する予定である。こうした一連の学びも、ゼミ生にとって意義があったものと考えている。

⑦にしこくおみやげPJがJR東日本地方創生アイデアコンテストで優秀賞（*26年度分）

2023年度以降継続して、西国分寺駅にて、JR東日本の協力の下、知的障害者の就労支援を手掛ける社会福祉法人Annbee提供のお菓子などを小木ゼミ生が売り方提案及び販売の手伝い、さらにはAnnbeeとのお菓子コラボなどを展開してきた。本プロジェクトは、JR東日本内での地方創生アイデアコンテスト（約113提案）でファイナリスト4案に選ばれ（優秀賞獲得）、2026年4月20日（高輪ゲートウェイ駅のJR東日本の会場）に、最優秀賞をかけたプレゼンに臨んだ。ファイナリスト4案選出及び最終プレゼンの結果に関しては、26年度の成果となる。

⑧Web国分寺物語の展開（取り組み自体が成果）

国分寺市とのPR連携／葵祭にこくベジの店として出店（こくベジを使ったスープカレーと、ブルーベリーの販売）／こくベジ販売やぶんぶんウォークなどのお手伝い／こくぶんじ写真コンクールの審査及び表彰式に参加、「国分寺物語賞」を継続設置／国分寺第2中学での探究活動レクチャー／Web国分寺物語をSNSで常時発信などにより、地域活性化プロジェクトとして展開した。

⑨TFT（テーブルフォートゥー）×東経大生協×小木ゼミによる健康ランチ制作・販売

6月末～7月初、11月末～12月初に、TFT×東経大生協×小木ゼミによるTFT健康ランチを制作・販売し、1食販売あたり20円をアフリカの子どもの給食に寄付した（25年度はおよそ4万円の寄付）。社会問題の解決の一助として教育実践活動を行った。

⑩経営学部ゼミ研究報告会にて研究報告／多摩大学AL祭にて招待ゼミとして発表

12月13日、経営学部ゼミ研究報告会にて3年生数名が個人研究を報告し、ゼミ全体の活性化に貢献した。また同日、多摩大学AL（アクティブラーニング）祭にて、招待ゼミとして多摩大学生及び多摩大学附属高校生などを中心にして、多くの大学生・高校生に向けて小木ゼミの取り組み（ゼミ活動の年間の総まとめ）を報告し、対外的に本学を知らしめた。

⑪新葵陵会館及び新女子寮会館のネーミングにゼミ生で応募・採用

ゼミ生全体でネーミング応募し、ゼミ3年生・飯沢実桜（26年度葵祭実行委員長）のネーミング「葵レジデンス」が採用された。マーケティングのゼミということもあり、ネーミングに応募したものだが、ゼミ生全員が参加・応募したことに、意義があると感じている。

⑫就職活動支援における成果

12月6日、小木ゼミOBOG会を開催し（本年度は若手卒業生が30名ほど来校）、現役生は就職のアドバイスをもらい、特に3年生の就職出陣式を決行した。また、夏合宿において、4年生（全員内定者）による2・3年生に向けた就職セミナーを開催した。この会は、学生からのフィードバック要素でもあるので、次なる教育的指導における私の勉強にも役立っている。さらに、4年生が毎年制作する冊子「ジョブ・ハンティング」（履歴書の書き方、就職の心得、進め方などを4年生一人一人がまとめたもので、毎年80ページおよぶ冊子）を3年生・2年生に配布し、アーカイブとしても収録した。この冊子による就職への貢献は測りきれず（圧倒的な就職力の原動力のひとつ）、私自身も大変勉強になっている。商売ができるほどの出来栄えに毎年舌を巻いている。

⑬成績優秀者の輩出

毎年経済学部・経営学部2・3・4年生あわせて10名ほどの成績優秀者を小木ゼミから輩出（2年生で学長賞も獲得・1年生成績上位2名）。さらに、卒業生の中で2学部4学科において1人は総代を輩出している（ここのところ4年連続）。これらは、個人カルテによる個別指導も寄与していると考えているので、結果が出ていることに関しては素直に嬉しい。

⑭進一層賞の獲得と評価、その他

上記の数々のゼミ活動が、進一層賞として評価され、3部門で受賞している。すべてゼミ活動によるもので、過去16年ほど連続で受賞している。

https://www.tku.ac.jp/upload/media/pdf/2025_TKUshinnissousyo.pdf

そのほか、大学広報への取材、オープンキャンパスのお手伝い、経営学部アカデミック

コンパス内（1年生履修）での2年生以降の履修プラン作成のための動画を学部を代表して小木ゼミが作成するなど、学部・大学運営にも貢献している。

上記の成果は、全て「独自の工夫や先進的な取り組み」から生じる教育実践と連動していると考えている。そのため、その年度に成果が多く出たとしても（出なかったとしても）、幹は「教育実践」や「学修者の主体的な取り組みを促す啓発的教育（「場」の創出も含め）」であることを強調しておきたい。個人的には、どのような崇高な教育を施したとしても、それに見合う成果が生じていないのであれば、徒労感しか残らないと考える。その意味では、一生懸命に教育を施した結果、25年度も含め毎年のように様々な成果を出していることは、学修者（ゼミ生）のモチベーションや帰属意識の向上に向けた教育が奏功していることに他ならず、教育者冥利に尽きると本報告書をまとめていて強く感じた。他のゼミの参考となる取り組みであれば、なお嬉しい。